

書評小原篤次・神宮健・伊藤博・門闖 編著
『中国の金融経済を学ぶ——加速するモバイル決済と
国際化する人民元』 ミネルヴァ書房，2019年6月。

張 馨 元[†]

はじめに

これまで中国経済に関する本は数多く出版されているが、金融セクターに焦点を当てた学術書は少ない。一般に、金融経済というテーマで書こうとすると、銀行業、保険業、為替制度、金融行政など幅広い分野に関する知識が要求される。本書は、日中両国の学者10名の知見を集約することで中国金融経済の全貌を描き出すという困難な課題に取り組んだ労作である。管見の限り、中国金融経済の変遷と特徴を包括的に分析した学術書は本書が初めてである。この書評は、本書の内容を紹介し幅広い読者に一読を薦めるものである。

I 本書の内容紹介

本書の構成は以下の通りである。

- 序 章 中国金融経済を学ぶ目的
- 第1章 改革開放と中国の金融業
- 第2章 中国金融制度の整備
- 第3章 金融業の規制緩和と競争
- 第4章 政策金融と農業・農村金融
- 第5章 国有企業改革からベンチャー企業支援へ
- 第6章 不良債権処理と金融資産管理会社
- 第7章 アセットマネジメントの急拡大

[†] 横浜国立大学 国際社会科学研究院 准教授

草稿提出日 2月27日

最終原稿提出日 2月27日

第8章 モバイル決済・インターネット金融の普及

第9章 フィンテックの発展と最新動向

第10章 中国金融業の海外展開

第11章 為替管理と人民元の国際化

終章 経済成長、金融行政、金融政策の展望

まず序章において、著者は、1978年以降における金融セクターの発展過程を概観し、その特徴について、「資金配分における間接金融の優位及び融資と金融機関における国有部門の支配」の2点を挙げている（3頁）。そして、政府による介入の影響を受けながらも市場メカニズムを導入し機能させてきた中国金融セクターの成長に注目し、ここから学ぶべきことが多いと指摘する。

続く第1章から第11章は、4つの部で構成されている。まず「第1部 金融セクター発展の歴史」は第1章と第2章からなる。第1章では、1978年以降、金融業が改革開放の一環として復活するプロセスが紹介されている。金融セクターの中心的位置を占めたのは長らく銀行業のみであったが、著者は、保険業と証券業も徐々に成長していたことを明らかにしている。第2章では、中国における金融制度の基本的枠組みが説明されている。中央銀行は金融政策の策定と実施を担っているが、市場においては多様な金融機関が存在し活動している。実際、移行経済といえる中国経済において、金融セクターは実に複雑な構造をもち、多様な問題に直面しているという。

続く「第2部 多様化する金融セクター」では、中国金融経済の多様性と問題点が5つの側面に分けて論じられている。すなわち、金融業の規制緩和と競争（第3章）、農業・農村金融（第4章）、国有企業改革からベンチャー企業支援へと変化する株式市場の役割（第5章）、不良債権問題（第6章）、シャドーバンキングと密接に関連するアセットマネジメントの急拡大（第7章）、の5側面である。

第2部の中で、評者は特に第4章と第7章の内容に注目したい。第4章では、農村・農民向けの資金供給問題について、「農民專業合作社をはじめとする非企業組織の多くが金融機関に提供できる担保とする資産を持たないため、正規金融組織からの融資を容易には得られない」（87頁）、「第三者が保証人となる保証付き融資が多く、…担保を提供してくれる相手が見つからない零細農家の場合は、金融機関からの融資を受けにくい状況が続いている」（88頁）と指摘し、都市部の金融に比べ軽視されがちな農村金融の課題を明らかにしている。

第7章では、著者は、シャドーバンキングを銀行のオンバランスでの融資以外の信用仲

介と定義し（130頁），それに内包される高いリスクを説明している。また，シャドーバンキングが拡大した背景として，金融商品に対する市場需要が政府の金利規制で満たされなかった点を指摘している。このことは，中国の預金金利自由化が，事実上市場の力，すなわちシャドーバンキングの拡大によって促進されたことを示唆している。

「第3部 フィンテックと金融イノベーション」は，本書の中で特徴的な部分であるといえる。第8章では，アリババ系列のアントフィナンシャル，テンセント，京東など大手企業の事例を中心に，インターネット金融の成長，非金融機関決済（いわゆる第三者決済）の普及過程と利用状況が紹介されている。第9章では，中国で行われたフィールド調査の結果を用いて，フィンテックの現状，金融・証券業におけるビッグデータやAI技術の応用，ブロックチェーン技術の開発状況が説明されている。

第10章と第11章は「第4部 金融セクターの国際化」に含まれる。第10章では中国の銀行業と保険業の海外展開の経緯，第11章では為替制度の改革状況と人民元の国際化について詳説されている。第4部の中では，人民元国際化の方針に関する指摘がとりわけ興味深い。すなわち中国政府は，世界的な規模での人民元の利用を推進しようとしているわけではなく，「中国が各国と行う取引について人民元建て比率を高める」ことを意図しているとの指摘である（221頁）。

終章では，アメリカとの経済競争が続く中，様々な金融問題に対応すべく，中国は今後も漸進的な金融経済の改革を進めることが必要であると指摘されている。なお，終章のあとに「中国金融統計：歴史，種類，探し方」と「主要用語対訳一覧（日本語・中国語・英語）」が付されており，実用性の高い資料が掲載されている。

II 本書の意義と課題

評者は金融経済を専門としていないが，中国経済を研究する者として，本書を紹介する意義は以下の3点にあると考える。第1に，歴史的アプローチを用いて中国金融経済の変遷を説明している点である。本書では，金融セクターの歴史を概観している第1部のほか，第2部と第4部の各章においても，各分野の1980年代以降における変化について説明がなされている。中国の金融セクターは，移行経済特有の経路依存的な問題を内包している。各分野の発展を計画経済期に遡って理解することが，金融セクターの現状と今後の変化を分析する際に一つのカギとなるであろう。

第2に，移行経済と大国経済の特徴を持つ中国金融業の状況を多様なトピックに分けて分析している点である。とりわけ第2部における金融業の規制緩和と競争，農業・農村金

融、不良債権、株式市場の問題、金融資産管理などの説明は、実体経済の動きと金融セクターの変化を結びつける際、示唆に富む内容である。

第3に、中国金融の最先端事情、すなわちデジタル経済に関連する動きを、現地調査の結果を交えながら分析している点である。とりわけ、第三者決済の清算モデルに関する説明は興味深い。というのも、現時点でモバイル決済が最も進んでいる中国においてさえ、既存の銀行中心の清算システムに根本的な変化が起きていないことが明らかにされているからである。図8-1(157頁)に示されるように、清算システムの上層部の構造はこれまでと同様である。変化は、あくまで下層部において、商業銀行と顧客との間を第三者決済機関が一部仲介する形で起きているにすぎない。銀行決済システムにおけるモバイル決済の位置づけを明らかにした点は、本書の貢献として評価される。

本書は中国金融経済の教科書として上梓されたものである(はしがき, i頁)。初心者向けとはいえないが、評者のように金融経済を専門としない者でも興味深く読むことができた。最後に、本書の課題についても指摘しておきたい。

まず、全体を統括する理論を欠いているように思われる。本書で紹介されている中国の状況は、標準的な金融システム論の視点からどのような特徴があると評価できるかについての説明が必要と思われる。本書の内容からすれば、金融論以外の枠組みで統括することも可能であろう。例えば、開発経済学の視点を援用し、実体経済の発展段階に合わせて金融セクターの成長を説明したほうが、各章の主張がよりクリアになるかもしれない。

また、経済関連の専門書としてはデータを用いた説明が不足している。序章では、中国のGDPに対する金融資産の比率が時系列で示され(図序-1, 2頁)、第5, 7, 9, 10章では、それぞれの分野の規模と金額などが紹介されている。しかし全体を通し、金融業の活動状況を示すデータが少なく、金融セクターの規模を統計的に把握する作業は行われていない。中国は、世界第2位のGDP規模を誇っている。その金融セクターの発展状況を、世界またはアジアの中でどのように捉えるべきか、本書に興味を持つ読者は少なからずこのような問題意識を持っているはずである。再版の機会があれば、金融データを用いた概観と国際比較に関する説明を入れてほしい。

以上のような課題はあるものの、本書は、日本語で書かれた中国金融経済の専門書として、貴重な成果である。本書は、金融のみならず、中国をはじめとする新興国経済全般に関心を持つすべての人々にとって読み応えのある良書であろう。